没理想論争注釈稿（八）

坂井　健

〔抄　録〕

森鴎外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争と言われる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鴎外への反論である「烏有先生に答ふ」（二）についての注釈。「没理想論争」については、さまざまに論じられているが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかというと、必ずしもそうではなく、ややもすれば机上の空論になりかねない。また、注釈についても、語釈のレベルにとどまり、視点も個別作家の文学論にのみ限定されがちであった。そこで、本稿では、語句の注釈から出発して、解釈にまで踏み込み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する二代作家の論争を通して、当時の文壇の文学思潮を探り、論争の後の文壇に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を新たに文学史の中で位置づけることを第二の目的とする。

キーワード：没理想、イデー、森鴎外、坪内逍遙、文芸批評

烏有先生に答ふ

其二

烏有先生が記実にあきたらずして談理を重んずる由縁に曰はく、

「羅馬なる聖彼得寺塔を観てミケランジェロが作りし雛形の美に驚くは建築を視る眼あるものゝ皆能くするところなるべし。これ美なりと記さば、記実者の役済むべけれど、談理者はそれにて足れりとすべからず。かの仏蘭西人それがしが如く高等静論の算法によりて、古人が不用意にして静性の極処に至れるを看破してこそ、その美なる所以を知るべきなれ。若し美の義を砕いて理に入ることあらずば、審美学は起らざるべし。逍遙子が記実の文を読むには、大帰納の力を具へざるべからず、予が談理の言を聞くに

は普通の理解力あれば足れりと。[1]」

審美的批評家の本分は、まことに先生のいはれたるが如し。わが嘗て「梓神子」といふ戯文の中にて、批評の事をいひたる時、世の搔撫での劇評をそしりて親切ならずと難ぜしも、全く同じ心なりき。[2] 先生の言は科学的にして、わが言は俗の言葉なれど、本意には差なからんか。それはともあれ、我れ未だ曾て美の義を砕いて理に入る事を非せし覚えはなし。所詮、我が謂ふ没理想の無理想もしくは無理性の義に同じからぬからは、此の段は解くべき要もなきがごとし。[3] さて、其の末段なる「逍遙子が記実の文を読むには、大帰納力を具へざる可からずと」いはれたるは確言なり。[4] 若し我が記実の本意が、直接の大感化にあるならば、真にいはれたるが如くならん。併しながら、わが第一の目的は、前段にもいへる如く、博く蒐集して文界の実相を記述し、博物場の如き者を呈せんといふにあれば、読者に片眼だにあらば、そを見ることは容易かるべく、必ずしも大帰納力をば要せざるべし。案ずるに、先生は　我が第三号に云へることを解嘲の辞と思はずして、『早稲田文学』の大主旨とやうに解せりとおぼし。[5] 曩にわが第三号に於て、世の大早計なる非難者[6]が、『早稲田文学』の第一二号を観て、明治文壇の活機いづこにか存したる、次号よりや見れん、といと冷かに嘲りたるに答へて、「活機の在否は我が評論の紙上にあらずして、汝が公平なる眼中にあるべし。「時文評論」の第四篇（ママ）に明治文学大帰一大調和の策あるかと問ふこと勿れ、その大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ」といひしは、無上無等の良策は虚心平気、活眼を開いて此の大宇宙を観るに如くは無し[7]との義にて、「汝一読の下に大帰納せよや」と命じたるにはあらず。[8] あくまでも「時文評論」は、無意識の間に多少の感化を施して、徐々「傾向」を誘致せんとする一種の持薬たるに過ぎざるものなり。難ずるものゝ曰はく、何為ぞ劇薬を投ぜざると。[9] 嗚呼、彼等は、劇薬のいと〳〵用ひ易くして、人間を益しがたき理を知らず。何ぞ共に医道を語るに足らん。所詮、「時文評論」は楷梯なり、材料なり、[10] 未だ他の世界を窮はざるものゝ為には、遊意を誘致すべき名所図絵たり、已にこゝかしこに歴遊して、略山川の地理に通じたるものゝ為には、[11] 曾遊の名所を想起すべき一種の簡明なる地誌なり、地図なり。後者、これに臨みては、此れと、彼れと、今と往と、比較対照の便宜を得て、或時はロツクカトリン[12]の水明と山媚とを憶ひ、或時は田子の浦ゆうちいでて見る真白なる富士の高根の風致をしのび、美の無量なるを意識せんか。わが謂ふ大帰納の素材とは、必ずしも直接の意味にはあらず。[13][14]

（1）**「羅馬なる聖彼得寺塔を観てミケランジェロが作りし雛形の美に驚くは・・・予が談理の言を聞くには普通の理解力あれば足れりと。」**・「早稲田文学の没理想」（『しがらみ草紙』二七号、明治二四年一二月）。以下、逍遙による鴎外文の引用はすべて同じ。鴎外文については、すでに注釈を施した（「没理想論争注釈稿（三）、（四）」（『文芸言語研究　文芸篇』二三号、二四号、筑波大学文芸・言語学系、一九九三年三月、九月）ので、ここでは繰り返さない。

（2）**審美的批評家の本分は、まことに先生のいはれたるが如し。わが嘗て「梓神子」といふ戯文の中にて、批評の事をいひたる時、世の搔撫での劇評をそしりて親切ならずと難ぜしも、全く同じ心なりき。**・「梓

神子」は、明治二四年五月一五日から六月一七日まで一一回にわたって『読売新聞』に連載。この中で初めて「没理想」の語が用いられた。「梓神子」は、『小説神髄』によって名をなした、逍遙と思しき人物が霊に祟られ、神子のもとを訪れて口寄せを求めると、日本古来の文豪が神子の口を借りて、逍遙をはじめとする明治の文壇の批評家を批判するという内容で、例えば、馬琴の幽霊が「頑にして鈍きこと汝の如き輩ありて、我理想を低しと誹り、我観念を卑しと罵る。而し些の證を示さず。恰も瞽家が芝居を観て芸を是非する所以を知らず、さら〳〵としてめでたかりき、もう一息ほしかったと譫語ぬかすと一般也。夫れ批評といふものは微妙不可説の旨い所といふにいはれぬ不可所とを解して言へばこそ有難かるべけれ、病人に茶漬を食はせもすまいに、ヤレ一息だの、さら〳〵だのと形而上的に言うてのける程ならば、批評家の世話にならずもあるべし。若し我作に非点があらば、何として一々指していはぬぞ。」などとあるのが、「世の掻撫での劇評をそしりて親切ならず」に該当すると思われる。ただし、鴎外文の「高等静論の算法」は黄金分割や和音のように無意識の美的判断の中に数理的な法則が働いていることを指すので、「微妙不可説の旨い所といふにいはれぬ不可所」を理解して具体的に批評せよとの逍遙の言とは微妙にズレがあり、必ずしも、「全く同じ心」とは言えない。なお、「親切」は初出「深切」。

(3) **それはともあれ、我れ未だ曾て美の義を砕いて理に入る事を非せし覚えはなし。所詮、我が謂ふ没理想の無理想もしくは無理性の義に同じからぬからは、此の段は解くべき要もなきがごとし。**・美学的原理の追求を否定したことはないとの逍遙の立場の表明。美学的原理の問題が、「理想」(イデー、世界の本質)の有無と無条件に結びつけて説かれている点が重要である。逍遙が「梓神子」でいう「理想」とは、「蓋し作者の理想広うしてせめても当代を容るゝことを得ば、其写す所は現在のみなりとも其相外に隠然として未来の当社会見えざるべしや。まして況んや其理想広く遠くして遍く人間を容れんには、啻に当国の未来のみならず、人間全体の未来をも現ぜんか。」と説かれる如きものであり、人間・社会に潜む普遍的な姿を表わすものであった。このような人生観的な「理想」と鴎外のいう「美の義を砕」いた美学的な「理」との間には前述のようにズレがあるにもかかわらず、鴎外・逍遙とも、そのズレに無頓着なまま論争は進んで行く。これは、そのような人生観的な「理想」と美学的な「理」が共通の摂理によって統合されているとのアプリオリな前提があったためであろう。戯曲論・批評論として出発した没理想論争がやがて哲学論争めいて行く所以である。

(4) **其の末段なる「逍遙子が記実の文を読むには、大帰納力を具へざる可からずと」いはれたるは確言なり。**・『早稲田文学』を読んで、その「記実」の文をもとに、直接、ただちに「明治文学大帰一、大調和の策」を「大帰納」せよという意味にとって、批判したのであれば、鴎外の批判はもっともである、との応答。ただし、自分は直接の意味で言ったのではない、との弁明が以下でなされる。なお、「いはれたるは確言なり」は、初出「いはれたる、確言なり」。

(5) **案ずるに、先生は　我が第三号に云へることを解嘲の辞と思はずして、『早稲田文学』の大主旨とやうに解せりとおぼし。**・以下に引かれるように、「我れにあらずして汝にあり」(『早稲田文学』三号)において、「『時文評論』、の第何篇に、明治文壇大帰一、大調和の策ぞと問ふこと勿れ。其の大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ」(「第四篇」とあるのは、「第何編」の誤植)と述べたのは、石橋思案、および斎藤緑雨の嘲りに対する弁解として述べたものなのだが、鴎外は、それを文字通り『早稲田文学』の主張と受け取っているように思える、との言明。「我れにあらずして汝にあり」における逍遙の発言は、思案・緑雨の「嘲難」に応えたものであり、そのためにものいいがやや極端になってしまっていた。そのことに対する逍遙の弁解である。坂井健「没理想論争の発端—石橋思案・斎藤緑雨の応酬をめぐって—」(『解釈』一九九五年四月)参照。なお、以下「第三号」とあるのは、「我れにあらずして汝にあり」を指す。

（6）**世の大早計なる非難者**・思案と緑雨を指す。

（7）**虚心平気、活眼を開いて此の大宇宙を観るに如くは無し**・先入観や偏見をなくして、公平な目で文学世界を見るのが先ず大切である。好悪により互いの攻撃に明け暮れるような、思案や緑雨の批評態度に対する批判。

（8）**「汝一読の下に大帰納せよや」と命じたるにはあらず。**・『早稲田文学』の「時文評論」を読んで、すぐに「明治文学大帰一、大調和の策」を「大帰納」せよと命じたのではない。だから、「逍遙子が記実の文を読むには、大帰納の力を具へざるべからず」という鴎外の非難は当たらない、といいたいわけである。

（9）**難ずるもの、曰はく、何為ぞ劇薬を投ぜざると。**・何を受けているかは未詳。

（10）**所詮、「時文評論」は楷梯なり、材料なり**・前に「彼等（坂井注・小理想家）をして彼等以外の世界に関したる理を聞かしむべき方便は如何。われは思へらく、先づ傾向を作らざるべからずと。悉しくいへば、彼等をして先づ遍く彼等以外の世界に目を注がしめて、無意識の間に、美の宇宙に充満せることを覚らしめざる可からず。」とある。

（11）**未だ他の世界を窮はざるもの**・自分だけの狭い文学観・主義主張に閉じ込もっている者。

（12）**已にこゝかしこに歴遊して、略山川の地理に通じたるもの**・すでに様々な文学観・主義主張に通じている者。

（13）**ロックカトリン**・アイルランド北部の湖。

（14）**わが謂ふ大帰納の素材とは、必ずしも直接の意にはあらず。**・「虚心平気、活眼を開いて此の大宇宙を観る」傾向を作るための素材を意味しているのであって、必ずしも「時文評論」を読んで直接「大帰納」せよといっているのではない。

烏有先生はまた逍遙子が常識を尊むを聞きて、これを難じて曰はく

「シヤツベリイが内官論はふりたり、リイドが常識も今の哲学の程度より見るときは、おそらくは取るに足らざるべし。常識は基督を生ぜず、常見は釈迦を成さず、「コンモンセンス」の間には一個の大詩人を着くべき処だにあらざるべしと。われ未だ曾て常識、常見を以て基督を生み釈迦を成ずべき料に供すべしといひしこと無し。[1] 第三号にて「偏へにアングロ・サクソンの着実なる常見を師となすべし」といひ、「寧ろ常識の報道者をもて自ら任ぜんとすべし」といひしは、其の務めとする所の主に記実にあればなり。『早稲田文学』の記事をば公平なる着眼によりて記述すべしといひたるに外ならず。造化人間の事をすべて此の物によりて料理すべしといへるにあらず。且つや、常見、常識の義も、リイド、ハミルトンらがいへるやうなるしたゝかなる意味にはあらで、[2] 其の文字のまゝに、普通の意味にて、愛憎好悪を離れたる常人の判断力といふ程の意味なりき。按ふに、此の段の先生の議論は、わが記実主義をもて、談理排斥の主義と信ぜられたるより生じた枝葉の論ならん。[3] 先生に取りては論理的自然の非難にはあれど、記実の本意を断りたる上[4]は、此の事もはや解きわくべき必要なし。

（1）**われ未だ曾て常識、常見を以て基督を生み釈迦を成ずべき料に供すべしといひしこと無し。**・以下に逍遙が述べるように、「常識、常見」は、公平な「記実」的報道を心がけることの意味で用いられたに過ぎないのだが、逍遙は「我れにあらずして汝にあり」で「博学卓見の学者は、世間に其の人いと多かり。仏人、独人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは醇々として現実の報道を旨とし、偏へにアングロ・サクソンの着実なる常見を師とすべし。」と仏・独国の学者と英国の学者を対立的に捉えているため、哲学的な立場

として、英国の学者がドイツ・フランスの学者の観念論と対立する経験論を取ることとの関わりから、「常識・常見」を強調しているとも見え、鴎外の非難も無理からぬ面がある。さらに先にも述べたように、文芸批評・美学的な問題が、人生観・哲学的問題と結びついていたことも影響して、「常識・常見」と基督・釈迦を結びつける鴎外のような非難が生じたのであろう。

（2）**常見、常識の義も、リイド、ハミルトンらがいへるやうなるしたゝかなる意味にはあらで**・ハミルトン（William Hamilton 一七八八～一八五六）はイギリスの哲学者。一八二一年エディンバラの歴史学教授、三六年哲学教授。いわゆるスコットランド学派の最後を飾る。認識論上、カント的意識から意識内容の変容としての心理意識を区別し、後者は主客対立を補足的に自己の内に有するとし、認識の絶対性を退けて、相対主義的見解にたつ。形而上学上、外界と理性の存在を事実とし、心理学上、能力心理学を唱導する。（『哲学事典』平凡社）。ハミルトンは鴎外文に見えない人名。リイドとともに挙げられているのは、どちらも鴎外の依って立つ客観的観念論の立場に対立する学者として、逍遙に意識されたからであろう。

（3）**わが記実主義をもて、談理排斥の主義と信ぜられたるより生じた枝葉の論ならん。**・これは（1）で述べたように、鴎外が「記実主義」をドイツ・フランスの観念論哲学と対立的なものと捉えたことによるだろう。

（4）**記実の本意を断わりたる上は**・自分の説く「記実」は決して「談理」を否定するものではないことを断ったのだから。

先生またわが没理想の論を駁して曰はく

「世界はひとり実なるのみならず、また想のみち〳〵たるあり。逍遙子は没理性界（意志界）を見て理性界を見ず、意識界を見て無意識界を見ず、意識生じて主観と客観と纔に分かるゝ所以をおもはず、老、荘、楊、墨、孔丘、釈迦、其の他古今の哲学者が観得たる世界を小なりとして自ら片輪なる世界を造らむは果敢なきすさみならまし。後天にのみ注げる眼はダルキンが論を守りても事足るべけれど、それにて造化は尽されず。孔雀の羽のいろ〳〵はその翰より受くる養おなじきに、色彩の変化は一本ごとに殊なり、その相殊なる色彩の合して渾身の紋理をなすは先天の理想にはあらざるかと。

此の段答ふべき必要あるを見ず。われ未だ曾て世界はひとり実なるのみといひし事無し。没理想の義は無理想の義にあらざればなり。[1] 只先生の説によりて、世界には想のまた充々たることを聞き知りぬ。没理想を説く我れは、未だ曾て此の世界に想絶無なりと説かぬものから、想満ちたりとも断言せず。先生は然らず、想の充満したることを確信せり。先生は

「已に理性界を観、無意識界を観て、美の理想（Idee）ありといひ、又これに適へる極致（Ideal）ありといへり。」

されば、先生は論じて曰はく

「破がねならぬ祇園精舎の鐘を聞くものは、待人恋ひしともおもひ、寂滅為楽とも感ずべけれど、其声の美に感ずるは一なり。沙羅双樹の花の色を観る者は諸行無常とも観じ、また只管にめでたしとも眺むめれど、其色の美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず、先天の理想はこの時暗中より躍りいでて、此声美なり、この色美なりと叫ぶなり。これ感納性の上の理想にあらずや。」

と。よりて知る、先生は、明かに一系の哲理を確信せる人なるを。[2] われは然らず。想を無しとも断言せざると同時に、想を有りと断言して、その想を指すことも能はざるなり。我れは消極にして、先生は積極なり。我れは成心の無からんことを勉め、先生は大いなる理想を発揮せんことを力む。われは未だに大理想を得ざるが故に、徐に記実の事に従ふ。按ふに、是れ我が現境の自然ならん。先生は已に大理想を得たり、かるが故に、進んで談理の筆を揮ふ。[3] 理の当に然るべきものあるなり。或ひは我れも又更に深く先生が哲学を聴きて、想のみち〳〵たる所以を覚悟せば、而して之れを信ずるを得るに至らば、此の禿たる記実の筆を擲ち、先生が驥尾に附して、破邪顕正の文を艸せんか。われ不肖いまだ其の境に到らざるを如何にせん。

（1）**没理想の義は無理想の義にあらざればなり。**・逍遙が「我が謂ふ没理想は、没却理想または不見理想の両義を含めり」（「没理想の語義を弁ず」『早稲田文学』八号、明治二五年一月）と述べるように、「没理想」とは、見えていない理想、隠れている理想の意味で、無理想の意味ではない。後に「没理想を説く我れは、未だ曾て此の世界に想絶無なりと説かぬものから、想満ちたりとも断言せず。」「想を無しとも断言せざると同時に、想を有りと断言して、その想を指すことも能はざるなり。」とあることからも分かるように、認識論的には、不可知主義の立場を取り、存在論的問題は回避している。石田忠彦氏が「棚上げ」と称する所以である。（石田忠彦『坪内逍遙研究』九州大学出版会、昭和六三年）

（2）**先生は、明かに一系の哲理を確信せる人なるを。**・鴎外文中「老、荘、楊、墨、孔丘、釈迦、其の他古今の哲学者が観得たる世界」に対応する。「烏有先生」（逍遙の思い込みでは鴎外）は、一つの世界観を確信しているというのであるが、逍遙の立場では、あらゆる哲学は相対的に過ぎず、絶対的な真理ではない。したがって、一つの真理を確信するまでは、理想を発揮することもできず、したがって、当面は「記実」に従うということになる。

（3）**先生は已に大理想を得たり、かるが故に、進んで談理の筆を揮ふ。**・逍遙は「梓神子」の中で、神子に使える老爺に「希臘の碩学アリストートルが斯う申したの、プレトーが左様におっしゃりましたのと（中略）ひつくるめて貴公達の批評は、手前勘の理想を荷ぎまわつての杓子定規。好悪愛憎の沙汰。真理でござるの、論理でござるのと表招牌立派なれど」と言わせ、哲学に基づいた作品批評を批判し、科学的な批評を主張している。

（さかいたけし　文学部専任講師）

一九九六年十月十六日受理